

自治大卒業生の声

自治大学校卒業生（第1部課程第137期）

群馬県 菅野 百合香

編集者注：本稿は、自治大学校における研修の特長などについて、自治大学校の卒業生が記したものです。

1 はじめに

もう一度、自治大派遣に行きたいかと聞かれたら、たぶん「もういい」と言うと思う。誤解を恐れずに言うならば、いい大人になって、朝から晩まで他人と共にいるということがこんなに辛いとは思わなかったのだ。

第一の誤算は、自治大のカリキュラムが過密なことである。派遣前は「時間外がない公務員人生なんて初めて！夜にはどんなことをしようかな」と期待に胸躍らせての出発だった、のに。とにかく提出物が多いのである。

かつて自治大を卒業された大先輩から「勉強はほどほどでいいから、人脈を作ってください」と言われ、しかし一方で業務多忙な中、自分を送り出してくれた所属の皆さんや家族の応援を思うと、勉強しない訳にもいかず、当初は葛藤の渦に沈み込んでいたものである。

勉強か、交流か。それが問題だ。立川にシェイクスピアがいたら、そう呟いたろう。

自治大生活の4ヶ月の中で、何度も、何度も思ったのは「個人の価値観が試されている」ということである。

勉強するのか、吐くまで呑むのか、感染拡大の中、外出をするかしないか、PCR検査を受けるか否か、授業は大教室かオンラインか。誰があっっていて、誰が間違っている訳でもない。でも、自分の選択に自信がない。他者の意見を聞くと、心が揺れる。自分かわいさに、自らの正義を振りかざして他人を傷つけてはいないだろうか、そんなことを繰り返し繰り返し考えていた。

2 基本法制研修A第7期

私たち第7期生は令和3年10月11日から4週間の研修に臨んだ。

憲法、民法、行政法、地方公務員法、地方自治制度、財政学。全ての講師が独特で、思い出すと笑ってしまう。ある科目では資料が7種類くらいあって、どう置けば即座に開けるか、スリリングな時間を過ごし、教科書どおりには話さないと言明して口頭でおもしろいことをたくさん話す講師もいて、関西の講師が多いからか、「あれはヘタレやな」とバツサリ切る辛口トーク等、飽きの来ない講義が目白押しである。

困ったのは演習。自分だけなら睡魔に襲われてもやむなしだが、演習となると班員に迷惑がかかる。「持ち越しは嫌なんで、スパッと終わらせましょう」そういった班員のスピード感！彼は私の生涯の師匠だ。

基本法制で忘れられないのは、「マニュアルではなく、自治六法や業務の根拠法に立ち返りなさい」という言葉である。法律、先例を重んじる一方で、最新の動きを押さえる大切さも学んだ。

3 第1部課程研修第137期

基本法制の効果測定が終わり、一時的に地元に戻って解放感を味わうも束の間、11月16日から第1部課程が始まった。

「テストもないし、政策立案だけ頑張れば！」その目論見は甘かった。テーマの設定、各演習の宿題や結果報告の提出等、毎日何かしらの提出物に追われたのである。

私は隣室の友人に泣きついた。どうしたらいいのか、と。彼女も同様に悩み、先輩からアドバイスを受けていた。「〇〇演習は、時間内に終わらせる時間管理のスキルを学

ぶ場と割り切るべし」と。なるほど納得である。事例演習のグループメンバーは、異様な処理速度で結果報告をまとめるのである。もう一人はテキトーなように見えて発表が絶妙にうまい。自分にできることって何だろ、と必死でついていく日々だった。

座学はもう、こんなに凄い人から話を聞けるのかという選りすぐりの講師陣から、多種多様な知識をご教示いただく毎日で、本当に楽しい時間だった。

演習も、私は当たり教授で、最初は宿題が多くて死にそうだったけど、事例演習、条例立案、ディベート演習、どれをとっても、長谷川彰一先生から学ぶことがたくさんあって、本当に幸せな時間だったと思う。

そして、一番の収穫は、やはり政策立案である。担当教授が、厳しかった。今日日珍しく、褒めずに貶しまくる鬼教授。ご指摘いただくことは『ごもっとも！』と思うものの、『今ですか？ 1週間前に言ってください！』と何度締め切り直前に青くなったことか。

どうやって乗り切ったか。それはもちろん、メンバーの力である。30代前半が3人と若くて柔らかく、速い対応ができる班だった。その代わり、文章が異様に雑。40代前半のメンバーは信念の人で、陰のリーダー。長老の自分も含め5人が一丸となって、走りながら作り上げて、最後の発表会を迎えた。もちろん、表彰台に上られるような内容ではなかったけど、担当教授からは「報告書はよくなった。しかしプレゼンはいまいちだった」という褒め貶しの言葉をいただく。(先生ってばもう…)

4 おわりに

さて、ここで、時を戻そう。最初の発言、「いい大人になって、朝から晩まで他人と共にいるということがこんなに辛いとは思わなかった」の真意である。

発表会の翌日の卒業式で、校長挨拶に、来

賓祝辞に、同輩の謝辞に、全て泣けるのである。夜逃げ同然に寮を片付けて玄関に行くと、大雪で翌日まで退寮を伸ばした仲間が握手を求める。泣くわ…。東京駅まで行く。三重、広島、石川と、一人ずつ順に、駅で別れる。翌朝。もう大丈夫だろうと思ったら、「送り忘れてた」という友人からの写真にまた号泣。私はコロナに感染したのではないかというくらい、息も切れ切れに、泣いた。

朝から晩まで共に過ごした仲間との別れが、こんなに辛いとは思わなかった。今はまだコロナ禍で県境をまたいで呑みに行くことも難しいが、在職中も退職後も、遠くても共に切磋琢磨し、時には全国各地に押しかけて、共に笑い、泣き、とことん呑むのだろう。

最後になるが、自治大の名講師、運営側の皆さま、同期の皆さんに、心からの感謝と笑顔を込めて。ありがとうございました。

【1部課程開講前夜 麗澤6階利き酒大会】

